

1

出典：三好由紀彦『はじめの哲学』

問一

設問は「具体的にどういうことですか」となっていますので、「私たちの精神の中」には具体的に何があるのかを述べている32行目の箇所を抜き出します。

問二

傍線（2）にある問に対する筆者の答えは次の段落にすぐ書かれています。二十四字の条件に合いませんので、同内容の箇所を探します。39行目を抜き出して正解となります。

問三

欲望の抑制や道徳の浸透による弊害の内容を答える問題です。42行目から43行目の表現を用いて答えます。

問四

平易な語句問題です。

問五

科学は宗教や彼岸思想に起源を持つものであるという筆者の主張の一つを聞いています。科学と宗教の関係は次の段落で具体例を用いて説明され、55行目からの段落でまとめられます。「『生きているものとしての世界』を切り刻み、分解することによって、『死んだ無機質なもの』として扱う」科学は、「死んだ後にこそ真実の世界があ」という「かつての宗教や彼岸思想が求めていたものと同じ」であるというのが筆者の考えです。この「同じ」という部分をさらに詳しく説明したのが80行目の「現実化、具体化」ですので、こちらでも使ってまとめていく必要があります。科学はかつての宗教や彼岸思想が考えていた「死後にも世界がある」という考えを具体化したものだからという方向で、字数に合わせて内容をまとめる力を試しています。

問六

（6）と（7）には同じものが、（8）には別のものが入るとわかればすぐに答えられると思います。筆者の2つめの主張は「死後にも世界がある」という科学の前提を見直さないと環境破壊などの問題は解決できないという内容ですので、（8）にはイが、（6）（7）にはアが入ります。

問七

平易な漢字の問題です。

問八

内容合致の問題です。選択肢の前半はすべて同じですので、後半部の違いに注目します。問六にあったように、筆者の二つ目の主張は「死後にも世界がある」という科学の前提を見直さないと環境破壊などの問題は解決できないという内容ですので、ウが正解となります。

2

出典：伊藤遊『ユウキ』

問一

傍線（１）の後を読んでいくとその内容がわかるように書かれています。２１・２４行目の表現をまとめれば正解です。

問二

平易な慣用句の問題です。

問三

４８行目の「ところが勇毅はもういない」というカズヤの発言の中にどんな意味があるのかを答える問題です。「ところが」は稲山小との試合があるのにということであり、勇毅は去年その試合で活躍したと書かれていますから、「稲山小との試合があるのに、サッカーのうまい勇毅がいないこと。」などとまとめれば正解です。

問四

転校してしまった男の子と転校してきた女の子が同じ名前であったために生まれた勘違いです。

問五

ケイタの気持ちを聞く問題です。傍線（５）の直後に「つかえながら弁解を始めた」とありますので、あわてていることがわかります。すると選択肢のイの「あわてている」かエの「落ち着きのない」となりますが、優希がいるからあわてているわけですので、イが正解です。

問六

つぶやいたのは傍線（6）の3行前にあるとおり、思わずどなってしまう、優希がびっくりしてこっちを見たからです。ただ、107行目を読むと、それだけではなかったこともわかります。「優希をびっくりさせた気まずさ」と「優希と手のひらを合わせる姿を想像して恥ずかしく思っている」という二つの要素を入れてまとめます。

問七

124行目にもあるとおり「息をつめて」は緊張感を表しています。なぜ緊張したのかといえば、エリカの伴奏が成功するかどうかを心配しているからです。

問八

内容合致の問題です。アはカズヤがエリカを気にかけるという内容が、イはカズヤたちにかからかわれることによってという理由の部分がまちがいです。勇毅の転校先は書かれていないのでウもまちがいです。